

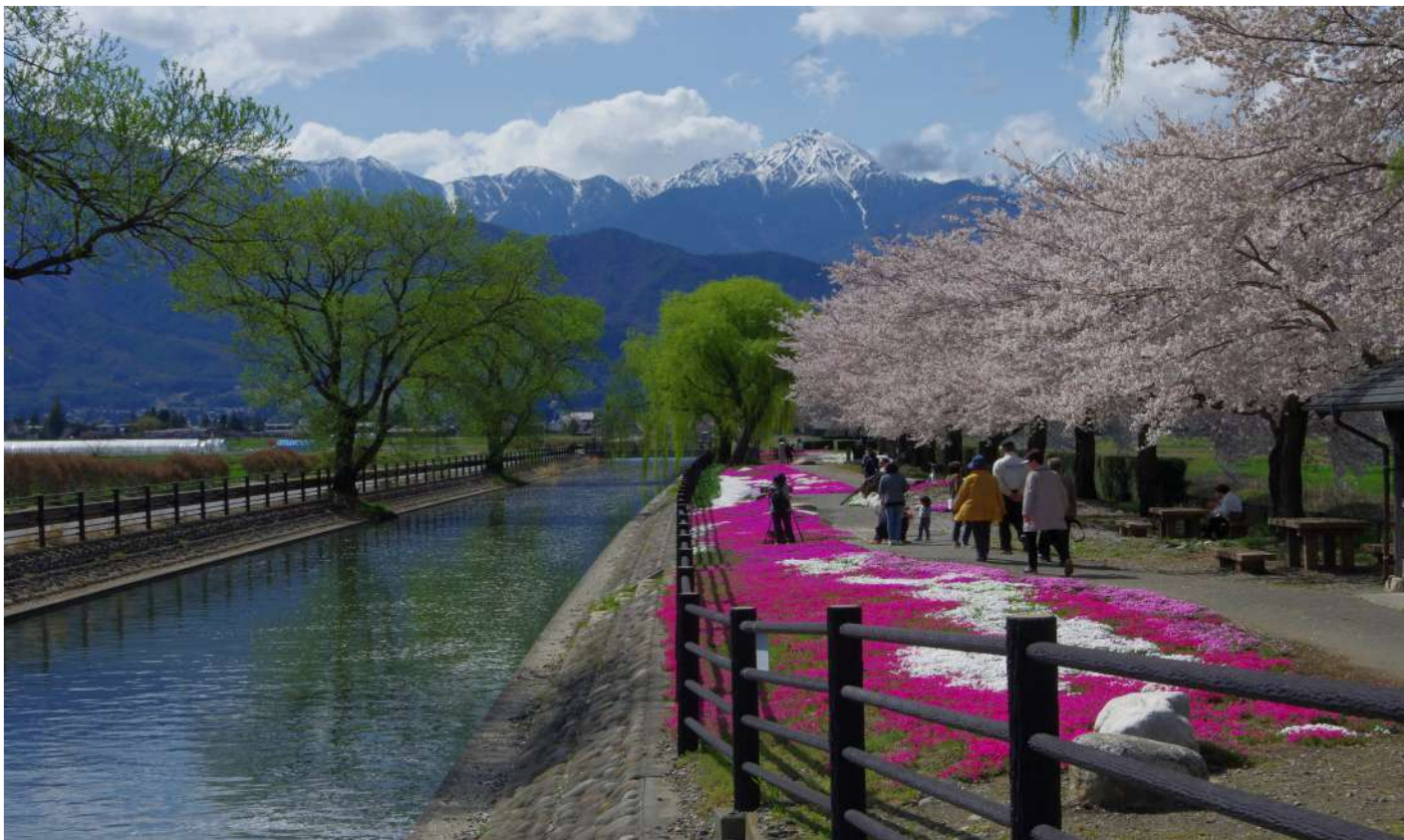
安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 旅のお伴に古代を！・・・・・・・・・・丸山祐之
- 2・3 「安曇氏族の興亡」こぼれ話・・・・・・・・金井 恂
- 4・5 歴史は幻想の物語か定説への疑問・・・本郷敏行
- 6 松川地区の古代史研究を担当して・・・・・・・・小林幹伸
安曇郡の高家郷 梓川村の古代史は・・・・・・・・有賀裕司
我が家の畑から縄文遺跡・・・・・・・・千國寛一
- 7 私の遺跡熱・・・・・・・・・・・・・保阪庸三
ニッポン全国「穂高見命」巡りの旅・・・・古川幸男
- 8 就任のご挨拶 穂高神社宮司・・・・・・・・穂高光雄
「仁科濫觴記者」半信半疑の勉強会・・・・川崎克之

発行:安曇誕生の系譜を探る会 発行責任者:丸山祐之 編集委員長:本郷敏行 事務局長:川崎克之 〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3



旅のお伴に古代を！

会長 丸山祐之

3年程前、友人たちとの旧交を温めるため、志摩市の賢島へ行く機会があり、その折、皆と別れた後一人車を駆って奈良盆地を訪れました。目的は飛び込みで桜井市纏向学術センターの主任研究員で纏向遺跡発掘の先頭に立っておられた橋本輝彦さんに会うためでした。

明日香村で一泊し、早朝甘樫丘をブラブラしてから、隣の桜井市に向かい、途中南端にある箸墓古墳を右手に見ながら、近年の大発掘で卑弥呼の宮殿ではとされる大型建物跡のある纏向遺跡地域の中心部に入りました。センターの正確な場所を知らないため、勝山古墳や纏向石塚古墳などを見ながら探しましたがなかなか見つからず、最後はこれでダメならば諦めて帰ろうと思い訪ねた建物がその場所でした。しかも幸運なことに橋本さんもいらっして会えることが出来ました。

橋本さんに会おうとしたきっかけはほんの偶然です。賢島へ行く数日前に、同氏が近々安曇野市にいらっしやっ

て纏向遺跡と天蚕について講演をされることを知り、訪ねたくなったという、まことに単純な動機です。

1991年の調査で出土した巾着状布製品が絹製であることが判明し、しかもそれが家蚕でなく天蚕の繭に由来することが確実視され、安曇野市で天蚕の飼育が盛んとの縁でお話をさせていただけるとのことでした。突然の私の訪問を快く受け入れてくださって、事務所の金庫？に大切に保管されていた実物まで見せていただき感激し、なんとなく幸せな気分になった旅でした。

旅をする際“古代”をちょっと絡ませることで、旅の楽しみが倍増するような気がします。現在我々の会では、松本市から小谷村まで地域研究の対象を拡げております。安曇野の古代史を整理し探っておけば、安曇野地域のまち歩きも更に楽しいものになるのではと期待しているところです。

安曇という氏族集団のおこり

弥生時代に北九州地域に渡来した人々はあちこちに分散し、別々に定住した。当初においては家族を核とした血縁集団であり、それが拡大成長して非血縁者も含めた血縁的同族集団となったと考えられる。詳細は別紙とするが、安曇氏族はそうした氏族集団の中の一つである。つまり安曇氏族は弥生人社会のなかで形成された多くの古代氏族の中の一つだった。そして古代においては大和王権の中核で活躍していた実在の古代氏族である。

弥生人たちは氏族名を有していなかった

弥生時代の渡来人たちは中国や朝鮮で暮らしていた時、自分たちの姓を持っていなかったのである。安曇氏族も同様である。それは次のような史実から推測できる。

まず古いものとして、中国の『後漢書』によると、後漢光武帝のとき、西暦57年（弥生時代中期）に倭の奴国が使者を洛陽の都に派遣して朝貢し、「漢委奴国王」金印を下賜された。そのとき奴国の使人は大夫と称していたと記されている。この大夫は国の支配階級の間人という意味と考えられ、使者の名前ではなく、氏族名でもない。さらにその後、西暦107年に倭国王師升（すいしょう）等が生口百六十人を献じたことの記録もある。ここには「師升」という名前のみで、やはり氏族名は記されていない。このころの倭国では氏族名は使われていなかったのである。

それから約百五十年後、西暦239年頃（弥生時代後期）の日本（倭国）の様子が『魏誌』（倭人伝）に詳細に記載されている。邪馬台国と卑弥呼の時代の話である。これには多くの国の名前やその長官・副官の名前が記載されている。当時倭国では漢字は使われていなかったもので、魏の使者が倭人の話し言葉を耳で聞いて、それを漢字で表現したものである。そこに記された名前は氏族名らしきものではなくて、個人の名前と考えられる。卑弥呼の場合も氏族名ではない。この頃倭人たちは氏族名を使っていなかったのである。なお「卑弥呼の宗族の娘台与（壹與）」という記述があり、当時倭国には「宗族」という血縁的氏族集団があったこと、つまり氏族集団はすでに形成されていたことが分かる。これらの事情は、弥生時代の渡来人たちは氏族名を持たず、漢字文字を持っていなかったことを示している。彼らは、渡来する以前において中国の先進文化と無縁の生活をしていて、下層の一般人だったと考えられる。

氏族名の発生

その後さらに約百五十年後、5世紀の倭の五王の時代になっても氏族名は使われていない。この頃のことを『宋書』倭国伝に記載されているが、それには倭讚、倭濟、倭王武と表記されている。「倭」は中国側が勝

手に付けていた呼び名であり、氏族名でもない。つまり大王の氏族名は記されていない。

そして雄略天皇の時代の鉄剣銘文が二つある。埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘文と熊本県江田船山古墳出土の鉄刀銘文である。稲荷山古墳鉄剣では持ち主の乎獲居（おわけ）と言う人とその8代にわたる一族の系譜が刻まれているが、名前のみであり氏族名は記されていない。つまり、乎獲居の一族は血縁的氏族集団として存在していたのであるが、氏族名を持っていなかったのである。江田船山古墳鉄刀では、持ち主は厶利亘（むりて）と記され、やはり名前のみである。この両者はともに雄略天皇の側近であり大和王権の中核部で活躍していた人物だったが、氏族名を持っていなかった。

一方『日本書紀』によると雄略天皇が即位したとき（456年）、「平群臣真鳥を以ちて大臣とし、大伴連室屋・物部連目を以ちて大連としたまふ」とある。これから、平群、大伴、物部という氏族名はできていたことが分かる。そして大臣、大連がいたということは、臣、連が他にも多数いたと考えられる。つまり大和王権の上層部では氏族名ができており、大和王権に組み込まれた「臣」、「連」という姓（かばね）もできていたことが分かる。

葛城氏は大和王権の成立時代、大王と並んで活躍した氏族である。葛城襲津彦が祖とされているが、この葛城襲津彦は実在の人物ではないとのことである。加藤謙吉氏は『大和の豪族と渡来人、葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』（吉川弘文館、2002）のなかで次のように指摘している。「葛城襲津彦の「葛城」とはウヂではなく地名を表したものとみるべきである。ただ葛城地方の土豪たちは、外部勢力と政治的に対峙する必要上、共通の利害関係で結ばれており、結束を維持するために互いに擬制的な同族関係を形成していた可能性が大きい。襲津彦はこのような同族的結合の要となる象徴的存在として位置づけられた人物なのであろう」。また前之園亮一氏は「ウヂとカバネ」（『日本の古代11ウヂとイェ』大林太良編、中央公論、昭62年）の中で、「五世紀に后妃を輩出した葛城氏のような大族でも、ウヂの組織とウヂの名が成立したのは五世紀末であった」と述べている。このような大和王権の政治組織としての氏姓制度（詳細別掲）が確立した時期は大和王権が確立される頃つまり5世紀後半から6世紀前半という考えが通説となっている。

しかし氏族集団はそれ以前から自分たちの名称を、それが具体的どのようなものだったかは不明であるが、持っていたと考えられる。大和王権が確立する4～5世紀のころは、大王を中心とする氏族集団の連合体であり、それが日本の各地を征服し統一していったのである。その際、氏族集団はそれぞれに軍事的機能あるいは武器製造・食料生産等の職業的機能を分担していたと考えられる。それは氏姓制度の初期形態だったと考えられる。

漢字表記の導入と氏族名の発生

氏族名が成立したのは、漢字文字の使用と連動していると考えられる。日本で漢字文字が使われ始めたのは少なくとも4世紀後半以降と考えられ、当初は朝鮮半島からの渡来人・帰化人たちが使っていた。そして当時の日本の豪族たちは、中国の高い文化と強大な国力に強い憧れと敬意を持っていた。帰化人たちの持つ優れた知識を吸収しようと努めた。当時の倭国には倭人の話し言葉があったが文字はなかった。そこで倭人の話し言葉を、漢字を表音文字として使って書き表すようにしていたと思われる。漢字文字は、当初は帰化人たちが使っていたが、大和政権や有力氏族たちに伝播していったと思われる。有力氏族たちは大和王権の中で自己主張を強くし、他の氏族たちと識別するために、文字を習い氏族名を漢字表記して名乗るようになったと考えられる。とすると前述したように、大和王権の政治組織としての氏姓制が成立する以前から、氏族名はできていたと考えることは妥当と言える。

安曇姓のはじまり

安曇が最初に知られるのは、『日本書紀』の応神天皇3年条の「処処の海人、訕彘（さばめ）きて命に従わず。則ち阿曇連の祖大浜宿禰を遣わして、其の訕彘を平ぐ。因りて海人（あま）の宰（みこともち）とす」という記述である。ここで大浜宿禰の大浜は氏族名ではなく名前であり、そして宿禰は敬称とのことである。つまりこの時代には安曇氏族の氏族名はなく、「阿曇」氏とは名乗っていないのである。

なお応神天皇3年は、朝鮮の三国史記と対比して算出すると、385年となることである。そしてこの文面から、大浜宿禰はすでに大和王権に従属し、政治組織あるいは職業組織として組み込まれていたと思われる。

つぎに「阿曇」という氏族名が『日本書紀』に最初に登場するのは、阿曇連浜子である。仁徳天皇が崩御し履中天皇が即位しようとするときに、住吉仲皇子による皇太子（即位前の履中天皇）暗殺のクーデターが起こる。その詳細は別紙とするが、阿曇連浜子は誘われてクーデターに加担したとある。阿曇連浜子は、『古代氏族系譜集成』（宝賀寿男、古代氏族研究会、1986）によると、大浜宿禰の子供である。履中天皇の即位年は『古事記』に基づいて算出すると、詳細は省くが、427年と考えられる。

すると、阿曇連浜子は427年には阿曇と名乗っていたことになる。と言うよりも、385年に大浜宿禰が海人の宰に任じられた後、阿曇連と改名したと思われる。これは恐らく、応神天皇から与えられた氏姓（ウヂ）であり、「阿曇」という氏族名と「連」という姓（かばね）であると考えられる。そして子供である阿曇連浜子も阿曇連を名乗った。これらのことは安曇氏の墓誌に基づいていると思われ、また後世の安曇宿禰と高橋朝臣との争いの経緯からも妥当と考えられる。

つまり安曇氏族は4世紀末に安曇連という氏姓（ウヂ）を持ち、大和王権の政治組織に組み込まれたのである。これは他の氏族に比べると、かなり早い時代である。

全国に分散した安曇氏族の姓について

しかしここには大きな問題がある。安曇氏族は全国各地に進出し、定住しているのである。その安曇氏族はいつ進出移動したかという問題である。

安曇氏族の氏姓が成立してから全国各地へ進出したと考えることは困難である。その理由は、5世紀以降に全国進出していったと仮定してみると、それは古墳時代中期以降であり、その頃には全国各地域で豪族がすでに台頭しており、新参の氏族が新たに進出する余地は少なかったと考えられるからである。さらに、安曇連浜子が国家反逆者として罰せられた状況の中で、全国各地に進出することは困難と考えられる。

すると安曇連ができる以前、そのころよりもっと古い弥生時代に全国に進出し、各地に分散し定着していたと考えざるを得ない。それは、安曇氏族が定着したゆかりの地の状況からも、十分に納得できることである。

すると全国に分散した同族集団に対して、安曇という氏族名を伝達したということになる。安曇連という氏姓を大王から授与されたということは、当時の氏族集団にとってとてつもなく名誉なことであり、権威と権力を有するものであったと思われる。そこで全国に分散した一族たちにも連絡通知したと思われる。

安曇という氏族集団がそれほど結束の固い、しかも連絡を取り合い続けていた集団だったということになる。ここには安曇という氏族の壮大な叙事詩が潜んでいるように思える。

その後の安曇氏族

安曇氏族集団が全国に進出し定着した地は安曇氏族ゆかりの地である。そのゆかりの地は、詳細は別掲とするが、関東以西の広い範囲にわたって多数存在している。その分布状態を見ると、安曇氏族がいかに強大であったかということが納得できる。しかし現在では安曇氏族の痕跡は薄くなってしまった。かつては安曇郷と呼ばれる地域が多数あったが、いまでは長野県安曇野市（信濃国安曇郡）と鳥取県米子市上安曇・下安曇（伯耆国会見郡安曇郷）の二つだけになってしまった。筑前国糟屋郡安曇郷、三河国渥美郡渥美郷、美濃国厚見郡厚見郷、近江国伊香郡安曇郷、丹後国加佐郡凡海郷はいまでは無くなってしまった。

そして安曇と名乗る人々も少なくなってしまう。その数は、ネットの情報によると全国で約300名が確認できるとのことである。まさに古代氏族の夢の跡を見るようである。

安曇氏族は古代氏族の中では有名な氏族であり、さまざまに語られてきた。その結果、実像から離れた虚像が広がってしまっている。そこで今後は、安曇氏族の実像を明らかにすることが大事である。

歴史は精神分析の対象になるそうである。そしてその専門家によれば歴史は幻想の物語ということになる。確かに我々の目指す古代は史料も乏しく神話や伝承に頼るところが多く、幻想と言われても致し方ない。勿論精神分析専門家の歴史の幻想とは異質のものであるが。

さて今年度我が会の活動計画のメイン事業は「新たな視点で安曇野の古代史を学び直す」というものである。具体的には現安曇野市域、及び周辺地域を時代別、地域別に考察して安曇氏という古代氏族の実体を明らかにし、安曇平の開拓、建郡の過程をつかむことである。そしてその結果を整理統合すれば安曇の古代史の構築が出来るかも知れない。我々の目的でもある「安曇のルーツ」を探ることが出来るかも知れない訳である。しかし現実には安曇に関する文献史料は少ない。先人の優れた考察や論考は数多くあるが「安曇族を明確に定義する中で信濃・安曇への進出等を論究しているのではない」、「安曇族の安曇定住等を歴史の事実として取り扱い、考古学的な調査結果や論文等をその裏付けとして用いる例も目立つが、論究や調査結果を正確に反映しているかについて、やや混乱や不十分な面もみられる」という見解もある。近年の考古学的科学技術の進歩からすれば我々素人としても満足できるものではない。

古代史は地名・人名が重要な史料となり、記紀に頼らなければ考古学が頼りとする研究者もいる。であるが故に我々も考古学的事蹟について学び直しているのである。

また講演会等において「安曇の研究」は地域や個別状況等を特化して追及するよりは、日本列島全体の状況を踏まえ相互に検証し客観性を持たせることが妥当であると提言されている。これらのことを念頭に浅学を省みず無知を憚らず安曇と日本史の定説といわれているものに挑戦してみたい。旧来の史観で研究された方には俄かには理解しがたい部分もあるはずであるがお許しをいただきたい。安曇を考える前段として日本列島の初期の部分について出来るだけ共通認識を持つためにも、定説といわれるものの危うさを理解する必要があると思う。（なお紙面の都合で出展資料の説明や漢文の原文は省略させていただく）

§ テーマ1 日本列島へ最初に来た人々

今日までの研究では後期旧石器時代に人類が初めて列島に来たとされている。旧石器人と呼ぶ人もいるが形質的に変化がないことからこの人たちを縄文人と呼ぶ人もいる。

この人たちはアフリカで誕生し進化した現生人類＝新人（ホモサピエンス）といわれる人々である。原人、旧人の段階でアフリカを出た人々もいるが、すべて死

滅しているそうである。従ってアフリカで猿人、原人、旧人、新人と進化した人々である。アフリカを出発してアジアへ向かった人々はスンダランド（亜大陸）に到着した。（インドシナ半島、マレーシア、インドネシア等はかつて一つの大陸状であった）ここで一部の人々は海洋性の生活を身につけた。やがて陸地（中国大陸、シベリア方面）を目指す人々と海（沖縄方面、オーストラリア方面）を目指す人々が新天地に向けて出発した。列島に来たのは北海道ルート（25000年前）、対馬ルート（38000年前）、沖縄ルート（30000年前）の三方からである。

（原モンゴロイド・スンダランド系と呼ぶことにします）この人たちが日本列島を生活の舞台として活躍します。北海道ではこの人達が縄文人の形質を色濃く残し続縄文文化、擦文文化を担い、やがてアイヌ文化をつくることになります。従ってアイヌは縄文系の人々であり異人種ではありません。ところがかつての研究者は「石器時代の信濃はその出土器から見て大部分アイヌ族の占拠地であった」と記述しています。アイヌ人と縄文人は同系統の人たちですから全くの間違ひとは言えませんが、なぜ縄文人（旧石器人）が出てこないのか不思議です。また「日本武尊の東征の頃には信濃の地には蝦夷（えぞ）が根強くはびこっていたようである」ともいっています。ここでは蝦夷とはアイヌのことを言っているようですが、日本史の中ではエミシが出て参りましてアイヌ・蝦夷・エミシの使い方が判らなくなります。アイヌはアイヌで北海道に暮らす人々です。蝦夷はエゾと発音してもよいと思いますがアイヌを指すものではありません。今日ではエゾとアイヌは別種とされています。蝦夷をエミシなどと読ませるからややこしくなります。蝦夷はアジア大陸の沿海州方面から来た外来の人々を指します。エミシはこれらとは全く別の古墳人の東北太平洋岸に移った人々の末裔で時の中央政権に反抗した人々とされています。

やや脱線してしまいましたが、日本列島に最初に来た人々はスンダランド系人類で縄文人とも旧石器人とも呼ばれる人々です。北海道で後にアイヌとなります。

§ テーマ2 倭

本来は次に弥生人について記さなければなりません、その前に“倭”について考えてみます。倭というと日本列島のことと考えがちですがこれは違います。現在でも倭とは日本列島のこととして扱う人が沢山います。日本には文献資料がありませんからやむを得ませんが、中国には文献があるのです。

『山海経』（撰者未詳、3世紀）

「蓋国は鋸にあり、大燕の南、倭の北、倭は燕に属す」とあることから山東省南方に倭があったということになるそうです。

『漢書』（班固撰、1世紀、後漢）「地理誌」

「楽浪海中に倭人あり」とあり「分かれて百余国をなす」とあることから日本列島に百余国あったと解釈されています。しかし楽浪海とは遼東湾の古名の由。地図で明示できればよいのですが列島にはとても結びつきません。楽浪といえば漢の四郡の楽浪郡、その先は海を渡れば日本列島と解釈したのでしょうか、漢の四郡は今の朝鮮半島にあったわけではありません。中国文献の研究不足はこのようなおかしな解釈を生んでしまいます。

魏志東夷伝、韓伝に「馬韓の南と弁韓の南はともに倭に接した」とか「弁韓は辰韓と雜居す、その瀆盧国は倭と界をなす」とあります。これらの文献から見えることは倭とは日本列島のことではないことは明白です。この当時の日本の歴史は古代北東アジア史の一部として見るべきであり、それには中国文献の検証が不可欠という指摘は素直に受け入れるべきでしょう。

§テーマ3 倭奴国

『後漢書』東夷伝

「建武中元二年倭奴国貢を奉じて朝賀し、使人みずから大夫を称す。倭国の極南海なり。光武賜ふに印綬を以てす」ご存知の有名な一文です。あの金印を下賜されたというものです。倭奴国を倭の奴と呼んで奴国をつくってしまった人やこの解決は未だ決着をみないようです。大勢の人がそれぞれの読みをしているようですが、最も意外なのは倭奴国をヤマトと発音するというものです。金印研究の大家といわれる先生の説だそうですがあきれざるばかりです。そもそも当時の漢では他国の国名を倭の奴というふうに二段で表すことはないということです。またナ音ならば奴ではなく奈、難、那等で表すのが普通ではないでしょうか。従って倭の奴国はあり得ないことになります。漢には「倭奴」（ウェノム）という夷人の蔑称が存在したらしいことが判明しています。さらに倭国の極南界なりをどう解釈するのでしょうか。文字通り読めば倭国の南端となりましょう。倭国がもし北九州にあるとすれば九州の南の端ということでしょうか。

私の拙い推論ですがこの当時倭奴国は未だ日本列島には存在しなかったのではないかと考えています。この当時日本列島から中国大陆へそう易々と航海できたとは思えません。

それと考えなくてはならないことは漢帝国にとって倭奴国程度の国は交易の一取引先に過ぎず政治的意味は殆どなかったと思われます。

したがって航海の危険を冒してまで日本列島に来る価値があったかどうかということで、そこまで海外情勢は判っていなかった、つまりここは韓半島どまりということになります。

§テーマ4 邪馬台国

日本史の中でこの言葉ほど広く知られているものはないといえます。ですが現在最も信頼できるといわれる版本には邪馬台国の文字はないということです。邪馬壹国です。

恐らく日本中の誰よりも「三国志（魏志）」を研究したであろうと思われる古田武彦さんが「邪馬台国はなかった」を著してから半世紀が経とうとしていますが、いっこうに改まる気配はありません。三国志の編者陳寿は自らの目で見ただけのものではありません。「伝わってくる情報は何カ国語にも訳され、かつまた世を隔て年月を久しくしてもたらされてきたものである」と記しています。魏志の目録には東夷の末尾に倭韓とあります。韓伝では倭韓であります。倭と倭は字体は違っても意味は同じということであり、これは倭人（やがて日本列島で弥生人となる人々）が「韓」にいたことを表していないかと考えられます。

古田さんによれば「3世紀の魏使たちが見たものは3世紀に生じた倭国ではなく、長い始発、征服、継続等の変転を持つ歴史、その帰結としての3世紀の倭国だった」と述べています。（文庫本発刊のあとがき）

邪馬壹国が韓半島発祥の渡来人の国だったことは他に澤田洋太郎氏が論考しています。

壹を臺の誤りとした学説はいかがなものでしょう。三国志に臺の字は一字もなく、後漢書には出てくるようですが、同書は三国志の後に書かれたものであり、史書としての価値は低いようです。また山形明郷さんは臺は三公五帝かそれに類する者にしか使われていない、ましてや国名には使われないといいています。また韓国の言語学者姜吉云氏は古田さんの邪馬壹国が正しいといい、これは「ヤマイ」と発音すべきだといっています。

以上の例のように日本の史学界はまだ研究が不十分だと思われます。我々としては原典が手に入るわけではなく、研究者の方々の結果に頼るわけですから、与えられるものを自ら考え、皆で議論して自分たちの推論をして行くということになります。我々としては素人集団とはいえ推論は出来るだけ学術的なものにしなければなりません。それが我々が次世代に残す成果を価値あるものにするはずだからであります。次世代へ残す手立てを考えることも我々の会の大事な務めだと思っています。

今回は「アヅミ」「倭人」について述べる紙面がなくなり別の機会に譲りますが、安曇についての見解を一つだけ紹介させていただきます。これは当会会員のK氏のものであります。

「安曇族とは安曇氏の先祖を漠然とある種の民族集団になぞらえた造語、または安曇氏の持つ文化や社会的特性を発生的に遡及した原子論的存在」というものであります。

我々としてはこの言葉を重く受けとめなければならないと思います。



松川地区の古代史研究を担当して

明科・池田・松川地域調査研究班 小林幹胖

安曇誕生の系譜を探る会では、5つの班に分かれて各班数人ずつで担当地区の町村史や関連文書等を参考にして学習しています。今後、各班の研究成果を持ち寄って安曇野の古代史を総合的にまとめる予定です。私は松川地区の現地視察や村史の調査を担当しました。

松川村史によれば当村では本格的な発掘調査は行われず資料等が少ないとのこと。今後、開発や発掘が進めばさらに新発見が期待されます。

1、西原3558番地遺跡から旧石器時代の尖頭石器が出土した。これは北安曇郡内高瀬川右岸では最古であるという。数点出土している旧石器時代に何らかの生活

活が営まれていたのではないかと現地は現在水田化して遺跡はその下に埋もれて今は何も有りません。

2、鼠穴及び有明山社遺跡は同村史上特筆すべき遺跡であると思う。とくに鼠穴地区は現代まで何らかのつながりがあるのではないかと考えます。穂高神社の神事では今もこの地区の人々が重要な役割を果たしている。

3、祖父ヶ塚古墳は6世紀末の円墳であり副葬品の一部の玉・銀環・頭椎太刀(使途不明)等は宮内庁に保管されているという事です。馬具の有無が不明なのが気になります。

以上、若干の所見を記しましたが、お気づきの点がありましたらご指導いただければ幸いです。

安曇郡の高家郷梓川村の古代史は・・・ 鞠子部と、八太氏が入郷して牧場経営

松本・梓川地域調査研究班 有賀裕司

「梓川村村史」には梓川の古代史関係資料が比較的少ない。古代と言われている年代は、一般的には古墳時代・奈良時代・平安時代で、12世紀末までを古代と呼んでいる。

大和朝廷の全国統一が進められる6世紀ごろ、梓川村へは鞠子(まりこ)神を奉祀する鞠子(まりこ)部(べ)と、同族の八太(はた)氏が入郷し牧場経営をするようになったと言われている。

村誌によると、丸子山は現在花見地区となっているが、古代には鞠子(まりこ)山と書いた。山頂には鞠子社がある。牧田である古幡田圃を眼下に見下ろし、波田・松本方面を見渡せる。6世紀ごろと推定される高坏が出土しており、その頃には集落ができていたと考えられる。

奈良の都が華やかだった天平宝字8年(764)、信濃国安曇郡前科(さきしな)郷の戸主(へぬし)安曇部真羊

が、調布麻一反を貢納したことが正倉院御物墨書名の中にあり、安曇郡と安曇部の存在を世に示している。

都が京都に遷され、一度は引きしめられた律令政治も、9世紀半ばを過ぎると政治の実権は天皇の手をはなれて、上皇や貴族(藤原氏)の手に移り、摂関政治・院政へと移行した。土地制度は崩れ荘園化が進み、武士の発生となり、実力のある武士が実権をにぎるようになる。

この平安時代中期(10世紀半ば)、東信地方の雄族滋野(しげの)氏一党が梓川村上野に入郷する。最初の目的は牧場経営で、先住の八太氏から大野牧を引き継ぐが、平安後期には土地の開削に力を入れ、いくつかの堰をつくり住吉庄を成立させる。

平安時代といえ、都の貴族の華やかな生活を思い浮かべるのだが、地方農民は奈良時代のまま堅穴住居と堀立柱建物で、土の上に直接藁(わら)や菰(こも)を敷いた生活で、戸主を中心にした大家族の生活であった。貴族と庶民の生活の格差が大きかったばかりでなく、農村内部でも貧富の格差は拡大した。

我が家の畑から縄文遺跡

大町・白馬・小谷地域調査研究班 千國寛一

私は小谷村出身ということで、とくに小谷村の古代について小谷村誌を中心に研究し、メンバー6名とともに意見交換してきました。

小谷村の歴史は旧石器時代に始まったものと思われ、旧石器時代の遺跡が3カ所で発見されています。また縄文時代の遺跡では、早期と後期の遺跡が多く、前期がこれに次ぎ、中期や晩期に属するものが少ないことが特徴です。

この縄文時代の遺跡に黒川城遺跡があります。この出土物は多彩で多量の土器が知られているほか、見事な2本の石棒が有名です。ヒスイや滑石製の装飾品もかなり出土しています。私もこの遺跡から土器が出ていることは子どもの頃から知ってはいました。賢い子どもの中にはヒスイや土器を拾い集める者もいましたが、私はとく

に興味もなく今日までできてしまいました。今回小谷村誌を勉強して、郡内屈指の有名な遺跡であることを知り、大変恥ずかしい思いをしております。なぜならば、この土地の一部は我が家の畑でした。数年前に村へ寄付して引き取ってもらいました。猫に小判とはこのことですね。後悔先に立たずです。

さて、話を元に戻しますが、縄文時代の遺跡は24カ所で発見されており、弥生時代の遺跡は3カ所にとどまっています。これは一説によると早期から前期にかけては、列島の気候が温暖に向かっている時期であり、住みよいところであったようです。しかし、その後世界的な規模での冷涼化と洪水を引き起こしやすい多雨による寒冷な気候を避けて、人々は温暖な土地へ移ったため、後晩期から弥生の遺跡数が激減したのではないかと考えられています。

引き続き、白馬村、大町市の古代についても研究したいと考えています。

私の遺跡熱

保阪庸三

現在より未来に目を向ける人のことを、人はロマンティストという一方、過去に物差しを置く人をセンチメンタリストというそうです。従って当会はセンチメンタルな人達の集団といえます。もう一つのモノ差しがあります。目を閉じて少し厚めの本を手で一カ所開いてもらいます。大概中高年は右手の方がページ数が多く開くそうです。左手の少ない方は自分の残された人生だそうです。

私が歴史好きになったのは少年期の体験だったようです。海辺より2Kほど離れた高台で友と興じていた時、崖から貝塚を捜したことがありました。それから何年かたった50年ほど前に本格的発掘調査が行われたそうです。小学校の分校を建て替える時縄文時代から後の遺物が発掘されました。私は海辺より離れた所へ親の事情で引っ越してしまっていたので、その場所が三殿台遺跡だということは後になって知りました。

成人してから歴史好きになったのは、偶然に手に取った昭和44年発行の「岩宿の発見（幻の旧石器を求めて）・相沢忠洋著」でした。彼は地元桐生市の遺跡好きで、昭和22年自転車で行商中、キャサリン台風一過の峠に差し掛かって一服していた時に関東ローム層の赤土から顔を

出していた石器を2つ見つけたのです。土器は皆無で一つも出てきません。つまり関東ローム層（富士山の噴火）時代に人が住んでいたなどと誰も信ずる人は居ませんでした。考古学という学問すら初めて聞いたそうです。後に旧石器であることは考古学的に証明されました。

彼は家の都合で親子5人バラバラになって少年期を過ごしました。忠洋少年は知り合いの鎌倉の杉本寺に預けられました。いつかまた家族と一緒に暮らせることを夢見ていたそうです。縄文時代が大変好きな人と話しますと「一家団欒」にあこがれている人が多いことに気づきます。

その後、日本人の生活ぶりを北海道から南の佐賀県まで遺跡中心に探索してきました。青森の三内丸山、仙台の地底の森ミュージアム、佐賀の吉野ケ里遺跡など、規模の大きさには大変驚嘆しました。また、ねつ造事件で有名になった高森遺跡も訪れてみました。また新潟県村上の奥三面川沿岸の2000年続いた縄文遺跡の発掘現場は大変印象に残るものでした。奥三面遺跡はサケが遡上していた場所です。

志賀島を訪れたことがありますのも私が安曇野に住んでいることにも縁を感じます。

ニッポン全国「穂高見命」めぐりの旅 その1

事務局次長 古川幸男

いざ旅へ（だけど前説から始めます）

当会会員である皆様におかれましては、今さら「穂高見命」については説明せずとも、「わかっているわいっ」て鼻息の荒い方もいらっしゃるかもしれませんが、そういう方は読み飛ばしていただいてけっこうです。つ〜か、今回は最後まで初心者向けだよ。残念でした。

最近入会された方で「なんだそりゃ」って分からない方もいらっしゃるかもしれませんが、ざっくりと説明いたします。本当はよく知らないんだけど、知っているふりをしている方もこっそりと小さくなってお読みください。

「穂高見命」＝”ほたかみのみこと”って読んでください。 ”いのち”じゃないよ。 ”めい”でもないのご注意ください。（おっと、ここでさりげなく漢字の読みの和音と漢音と呉音のちがいを説明しちゃったよ。これについては次回以降で掘り下げていきたいと思います）

「穂高見命」は安曇氏の祖神とされ穂高神社本殿にお祀りされている神様なのです。神話では、穂高の嶺に降臨され後に安曇野へ下られ開拓されたそうです。一説では、海神綿積神の子である豊玉姫・玉依姫とは姉弟とされ天皇家初代の神武天皇のおじさんって事になっていますが、本当のところはどうなのかわかりません。

「新撰姓氏録」（しんせんしょうじろく）によれば、右京の安曇宿禰、河内の安曇連は「穂高見命之後也」とあるが、「古事記」では安曇氏の祖神は「宇津志日金析

（うつしひかなさくのみこと）とされ「穂高見命」の名は出てきません。しかし同じ安曇氏の祖神だったら「同じじゃねえの」って事で、同体異名の神となっています。（ただし本当に同じ神様とは言えないかも？）だいたいこの辺の所を覚えておいていただければ不自由しません。あ一つ、豊玉姫についても書いておきます。豊玉姫は、海幸山幸でもおなじみの山幸彦の奥様になり、その孫が神武天皇ってことになっています。一応念のため。

「穂高見命」は綿積神の子で安曇氏の祖神となっていますが、神社でお祀りされているのはやっぱり綿積神の方が圧倒的に多い。で、「穂高見命」の方が少ない。だったら全部巡って実際どんなところか見てみようかと安易に考えちゃったこの企画。ニッポン全国におわします「穂高見命」を一カ所一カ所 旅してまわりコンプリートいたします！！

しかし問題もあります。①ニッポン全国ってほど全国に居ない。②福岡や和歌山などの遠隔地にもいらっしゃいますが、仕事の都合でまとまった休みがとれないので、行けるか不安。（早くも言い訳している）③「穂高見命」だけだと少なそ〜なので、同体異名の神とされる「宇津志日金析命」もOKとする。（しかし、それでも少ない）④比較的最近になってお祀りされた所も参考地としてまわる（それなりの理由があるはず）⑤モレがあるといけないので、穂高神社様にも問い合わせしてみる。

さあ、いよいよ旅に出発します！

今回は、愛と追憶の「仁科神明宮」編。乞うご期待！

就任の御挨拶 穂高神社 宮司 穂高光雄



会員の皆様方には格別なるご厚情を賜り心からお礼申し上げます。

此の度昨年12月9日付けをもちまして穂高神社宮司に就任致しました。ここに謹んでご報告申し上げます。長年に亘りご指導賜りました前小平宮司に感謝を申し上げ、築き上げられましたご苦勞を守り、更なる発展に力をそそぐ所存であります。

素より浅学非才の身にてその重さを痛感致しております。この上は一意専心御神徳を畏み御加護を仰ぎ神社の

護持運営、神社と氏子崇敬者、氏子崇敬者と神社の結びを大切に、伝統を守り神社隆昌、斯道の興隆発展に力の限り努力してゆく所存であります。

安曇誕生の系譜を探る会は早や10年を迎えようとしております。毎年盛り上がりを見せているのも、これも偏に会員各位の熱意と研究心溢れる成果でしょう。一人一人の研究や考察を発表され、まだまだ知られざる安曇族の誕生を深く探られ、会員相互の絆を太く調査研究に取り組まれ、精一杯やり遂げ達成感を感じられる会となるようお願い申し上げます。

神社としても協力を怠らず会員皆様方のご活躍を心から応援致します。

「仁科濫觴記考」半信半疑の勉強会

事務局長 川崎克之

昨年の2月からスタートした勉強会が今年の3月で漸く終了しました。真偽の程が定かでない「仁科濫觴記」を勉強会の素材にしたのは、個人的な関心もありましたが、本郷前副会長から「古事記のような神話だと思って読めばいい」と力強い？お薦めを頂き、会のテーマに相応しいか否かは別にして、勉強会の俎上に乗せることになりました。泉小太郎や八面大王伝説、またいくつかの神社の縁起、地名の発祥なども関連する安曇の古代に関わる希少な文書史料であり、文書史料との向き合い方を考えるには格好の材料と考えたからでもあります。

以来1年余り、月一回のペースで仁科宗一郎著「安曇の古代」の読み合せを中心に進めてきました。云わば仁科宗一郎氏のガイドによって勉強会を行った形です。勉強会では、参加者のこれまでの知見や疑問点を出し合って理解を深めてきました。資料批判とまではいきませんが、時には「仁科濫觴記」そのものを疑ったり、仁科宗一郎氏の解釈の難点を指摘したり、あるいは脱線したりしながらの和気あいあいとした勉強会でした。

「仁科濫觴記」には、安曇族や安曇氏に関する直接的な記述は全く出てきません。しかしそれらの存在を暗示するような記述や事柄が幾つも散見されます。これらを継ぎ合わせて推理し自分なりの仮説を紡ぎだすのも確かに楽しみ方の一つではあります。史料が乏しいなか、都合のよい部分を抜き出して自説に援用するには「神話」は



便利かもしれません。実際、何人かの郷土史家の著作に引用されて安曇族云々の根拠にされたりもしてきました。

これらの著作の中での「仁科濫觴記」の扱われ方を見ると、その著作・著者の「歴史」への向き合い方が理解できるような気がします。それは他の史料についても「仁科濫觴記」に対すると同じ方法で史料批判を行っていると感じるからです。

史料が乏しいゆえに藁にも縋るような思いで「神話」をつい援用してしまったとは思いたくありませんが、そうやって積み上げたものは歴史というよりはむしろロマンとでも言うべきかもしれません。安曇野の古代史の勉強をロマンのままに終わらせるか、歴史の探求にするのかを、考えさせられた「仁科濫觴記考」でした。

編集後記

池上勝三

どちらも前人の遺産

安曇野市が成立して、旧五町村指定の文化財が引き続き市の文化財として指定されました。各町村には二名からなる調査委員がおります。

目的は市指定文化財のパトロールを行うことで、ココの文化財の現状を把握し保全につなげる、また所有者及び管理者と対話することと文化財保護意識の維持に寄与するとあります。

年一回地区内一人一件の割り当てを消化して報告するのですが、所有者がはつきりわかっている場合以外、山間地に指定物のある場合過疎地のためどなたと接触をすればよいのか対応に苦慮します。

面接をして話を伺った中には堂内の仏像が盗難に遭われて、その後建物の内にまで鉄格子に鍵をかかけられる予防をされている人もおりました。

維持、管理をして今後も大事に保存し後世に残していくことの重要性を感じました。

※表紙の写真は、平成二八年に世界かんがい遺産に登録された拾ヶ堰の自転車広場。撮影は会員の小松宏彰さんです。